

コロナ禍だから考えたい ～「人生会議」最期まで、 自分らしく生きるために～

誰でも、いつでも、命に関わる大きな病気やケガをする可能性があります。

歩けなくなり、理解できる言葉も発する言葉もわずかになり、体の回復の見込みも少なく、いよいよ食事をとることもできなくなったら・・・

もしもあなたがそうなったら、どうありたいですか。

今回は、在宅医療現場に携わっている船戸崇史医師に、コロナ禍で感じた「人生の最期の迎え方」についてお話いただきました。

最期の迎え方について、通常では感染の可能性はないので、親族と会えるチャンスがあります。手を握ってくれるかもしれませんし「さようなら」も言えます。最期に言いたいことを直接話すこともできるでしょう。しかし、コロナ感染で亡くなる場合、最期は誰も親族とは会えず、「さようなら」も言えないまま、防護服の医療者の中で孤独に死んでゆかなければなりません。感染を外に広げないためには仕方ない光景といえますが、医療側も精一杯寄り添っているとはいえ、ご本人と親族にとってあまりに残酷です。よしんば人工呼吸器やECMOによって一命を取りとめたとしても、1～2カ月近く寝たきりであることが多く、生還しても四肢筋力や認知機能、諸々の機能低下でかなり廃用が進み、合併症を引きずることが多いといわれています。

私は在宅医療でたくさんの看取りをさせていただいていますが、その中で教えてもらったことは、その家の長老がこの世を去る最期の時が、まさに命のバトンを渡す時でもあるということです。その老人は、間もなく先祖となります。その人の生き様は双方向性で感謝の言葉とともに受け継がれていくものです。そして私は、この儀式が温かな手と心の交流の中で進んでいく様子を多く見てきました。コロナに感染して逝くということは、間違いなくその儀式ができなくなるということなのです。

これから3回目のワクチン接種が始まります。高齢の人で持病があればなおさら、予防接種は有効であると思います。そうでなくとも、近く訪れる最期の命のバトンをコロナ禍に奪われないためにも、ワクチンは有意義だろうと考えられます。

コロナ感染に限らず、「人生の最期」は突然訪れることがあります。自分の意思を伝えられない状態になったとき、どのようにしたいのか、どのような最期を迎えたいのかを、身近な人と話しておくこと、それはこれからの人生、ご自身の生き方を考えるきっかけにもなると思います。

養老町在宅医療・介護連携推進協議会
会長 船戸 崇史(船戸クリニック院長)